

「授業研究」をテーマに議論を交わした中部教育学会のシンポジウム＝17日、福井市江上町の福井医療大



教員同士一層研さんを

福井県をはじめ、静岡、愛知など中部8県の教育研究者で構成する中部教育学会の第66回大会が17日、福井市の福井医療大で開かれた。シンポジウムでは県内外の研究者が「授業研究」

た。公開授業後に研究会で意見交換する授業研究は、1990年代前半までは日本独自の学校文化だったが、2000年代には欧米やアジア諸国に広がり、効果が注目されるようになってきた。

福井で中部教育学会大会

「授業研究」題材に議論

をテーマに議論。生徒の学力向上につなげるため、教員同士の学び合いを一層充実させていくべきだと訴えた。

シンポジウムでは福井大大学院教育学研究科の木村優准教授が基調提案を行った。その上で、教師たちの同僚性を高め、学校における協働文化をつくるために授業研究は有効な方法であると強調。「複雑で不確実な時代に立ち向かう子どもたちにとって、深い理解を伴

う学びが必要であり教師の使命はますます大きくなる。ただ一人で立ち向かうには限界があり、持続的に学び合い、教師一人一人の意欲向上を促すコミュニケーションを培うことが重要だ」と訴えた。

岐阜大大学院教育学研究科の石川英志教授は、授業での子どもの反応などを洞察して記録する文化が衰えていると危惧し、「多忙な中で大変だと思うが、他の先生とつながるためにも『書く文化』を盛り上げていかなければならない」と述べた。

大会には約60人が参加。各県の教諭らによる研究発表も行われた。(宇野和宏)